

看護の意味と価値を紡ぎ出す 臨床看護師の語り

看護師の臨床の『知』 看護職生涯発達学の視点から



佐藤紀子 著
B6 判・248 ページ
定価 1890 円(本体 1800 円+税 5%)
ISBN 978-4-260-00562-3
医学書院, 2007

評者

吉田みつ子
日本赤十字看護大学

臨床ナースへの 暖かいまなざし

2002 年 4 月頃、佐藤紀子先生の研究室に伺ったことがある。そのときからすでに佐藤先生は、熟練した看護師たちが実際に臨床で展開している豊かな語りから看護の知のかたちを探っていききたいと、熱い思いを持っておられた¹⁾。あれから 5 年を経て、本書は著者の長年の研究成果をもとに、臨床実践の中で、いかにして患者との関係性をつくり、状況全体をとらえ、支えていくかという看護師の「関わり」の知に焦点をあてて描かれたものである。本書の副題には「看護職生涯発達学の視点から」とあり、著者は「基礎教育を含めて看護師が生涯にわたり発達し続けることを支援する学問」と位置づけている。20 代前半に看護師という職

業を選択した一人ひとりが、その後、生涯にわたって、看護師であることをどのように引き受け、何をよりどころにして看護師であり続けているのか、それを明らかにすることによって、臨床で働きつづける看護師の支えとなるものをみつけないといふ、著者の看護師に対する温かい眼差しが、本書には一貫して流れているように思う。

著者が聴きとり、再構成したエキスパートナースたちの 7 つのナラティブ(第 1 章「エキスパートナースの肖像」)には、思わず引き込まれ、あたかも自分がその場にいるような錯覚さえおぼえる。特に、40 歳代の結腸がんの女性患者 E さんが亡くなる日の朝、臨床 10 年目の看護師松田さんが、散歩をしたいという Eさんを車椅子の乗せ、二人で風にあたりながら過ごす場面の語りである。

病状が悪化し、差し迫るいのちの短さを全身で感じ、もがいている Eさんの心の痛み、心の叫びを、松田看護師は果たしてどこまで理解できていたのだろうかと自問し、それでもそばに居続け、向き合った。その時の E さんの苦しみ、松田看護師の苦しみ、せつなさ、そしてそれらをすべて洗い流すように、すうっと頬を抜けていく朝の冷たい空気感までもが伝わってくるような語りに、私は涙が止まらなかった。

エキスパートナースたちの語りには、それを読み聴く者を衝き動かし、それぞれの経験の奥底にある知を呼び起こし、その意味や価値を問う力がある。松田看護師のナラティブには、いっこうに回復しない病状にいらだつ E さんの心の痛みに対して、看護師としての役割を超え、一人の人間として E さんを気づかい、E さんとの時間を過ごし迎え入れようとするエキスパートナース松田さんの関わりの「知」があった。

看護を語ることの力

著者は、新卒看護師や熟練看護師のナラティブをもとに、看護師の臨床の知には、「閉ざされた『知』」、「相互作用の『知』」、「関わりの『知』」の 3 段階があることを発見している。それぞれの知は、看護師として相手やその場における存在の仕方、状況の意味の捉え方、関心のあり方の 3 つの側面から説明されている。

エキスパートナースが用いる「関わりの『知』」の特徴には、「病棟内の



人物や物理的環境を知り尽くし、目の前のクライアントに対し配慮する。配慮するためには、自分がよいと考えたことを貫く、信念や確信がある」という看護師の存在のありようがみられる。そして、状況の意味の捉え方の特徴としては、「今そこで起こっていることの意味を、過去の多くの事例との関連で瞬時に丸ごと把握し」、「クライアントの置かれている状況を全体としてとらえ、なおかつその重要な部分に着目し、クライアントのニーズを叶えるために直観的と捉えることができる行為をしていた」という。また、関心のあり方の特徴としては、「常に判断と行為を自分で意識しながら」「互いに配慮している関係性」「家族との日々の関わり」「気持ちの尊重」「願いを叶えたい」「積極的な関わり」をし、相手の関心に自分の関心を注いでいた」（本書，p.162，p.182-185）ことが明らかされている。

これらの特徴は、看護師たちの語りをもとに著者が特徴づけたものであるが、ナラティブとして描きだすに至るまでには、看護師たちの経験を大切に思い、聴き手としてそのナラティブをともに構成した著者の姿がある。本書に掲載された看護師たちの語りは、著者とともに紡ぎ出されたものであることを忘れてはならない。

以前、著者が次のように話されたことが思い出された。「看護職という、共通の仕事をしている者の間で語ることによって自分たちの仕事の内容がはっきりしてくるし、他の

ナースがいろいろ質問してくれた、感想を述べてくれることによって、実践知や暗黙知が意識化される。そのような語りは、単に慰め合うというような意味ではなくて、知の創造のために必要なことではないかと思う」¹⁾

看護職同士が、物語ること、それを聴くことによって、一人ひとりの看護師が実践の意味や自分の存在の意味を確認し、看護師であり続ける

力を持ち続けることができるのである。看護師自身がお互いにその意味と価値を認め合うことから始めようという、著者の思いが伝わってくる一冊である。📖

文献

1) 佐藤紀子，谷津裕子，吉田みつ子：【座談会】「語り」が明らかにするナースの“気づかい”私たちの仕事の意味はどこにある，看護学雑誌，66(6)，528-537，医学書院，2002.